

## トロピカーリア運動と 1960 年代以降のブラジル建築に関する研究

—ポスト・ポストモダニズムの建築を目指して—

小南弘季<sup>※1</sup> 寺田慎平<sup>※2</sup> 印牧岳彦<sup>※3</sup>  
杉崎広空<sup>※4</sup> 杉山結子<sup>※5</sup>

**概要** 本研究は、近代以降のブラジル建築を問い直すことによって、新たにポスト・ポストモダンと位置づけられるような建築のありかたや設計の方法論を探ろうとするものである。特に 1960 年代以降の音楽、映画、演劇、前衛芸術の文脈において起こったトロピカーリアと呼ばれる文化運動とその支柱となった思想を参照項とすることで、本当に「ブラジルにポストモダンはない」のかといった問いを中心に、これまで日本では知られてこなかったブラジル建築の魅力を新たに発見することを目的とする。

### 研究背景と目的

ブラジル建築は、ルシオ・コスタ [Lucio Costa] やオスカー・ニーマイヤー [Oscar Niemeyer] らによって手掛けられた建築を中心に、西欧とアメリカで誕生したインターナショナル・スタイルの早期の国際的展開として評価を受けてきた。一方、1960年代以降のブラジル建築については、リナ・ボ・バルディ [Lina Bo Bardi] やパウロ・メンデス・ダ・ホッシャ [Paulo Mendes da Rocha] の作品を除いてほとんど知られていない。

日本を含む国際的な建築界の動向としては、この時期はいわゆるポストモダニズムの全盛期にあたるが、軍事政権による独裁下（1964～1985）にあったブラジルにおいてその建築シーンは国際的な建築の動向とは切り離されていたようにみえる。その一方で、音楽や映画、演劇、前衛芸術においては「トロピカーリア [Tropicália]」と呼ばれる特筆すべき文化運動が展開されていた。

なかでも音楽は世界的に高い評価を受け、のちのブラジル音楽に大きな影響を与えた。これらの同時代的に発生した文化運動は、芸術と政治、大衆文化と前衛美学、伝統と近代といったさまざまな対立構図をめぐる当時のブラジル国内の議論を背景としつつ、前世代の文化運動との批判的対峙のなかで独自の表現を生み出すことに成功した<sup>1)2)3)</sup>。

しかし、これらの文化運動がブラジル国内外において非常に重視される一方で、建築の文脈においてそれらの運動が語られることはほとんどなかった。そこで本研究では、トロピカーリア運動から展開された「トロピカーリアの建築」のようなブラジル独自の建築がありえたのか、あるいはそれがない場合、その理由はどこにあったのかを明らかにしたい。そして、トロピカーリアの建築を探求するなかで、モダンとポストモダンの対立構図を超えた全球的な建築理論の構築をめざす。

※1 東京大学生産技術研究所 特任助教      ※2 w/共同主催      ※3 神奈川大学 特別助教

※4 東京科学大学環境・社会理工学院 博士後期課程、w/共同主催      ※5 東京大学大学院 博士後期課程

## 研究成果と考察

### 1. 食人と参照

トロピカーリア運動が当時のブラジル建築に影響を及ぼしていたのではないかとの仮説のもと、5つの都市を巡り、リナ・ボ・バルディやパウロ・メンデス・ダ・ホッシャ、エデュアルド・ロンゴ [Eduardo Longo] らの設計した建築を調査した。

この運動の思想的基盤としてオズワルド・ヂ・アンドラーヂ [Oswald de Andrade] の『食人宣言』がある。ここでの食人とは、文化的、哲学的に他者を自己の中に取り入れ、自己を改変する様を象徴しているが、トロピカーリアはその思想をもとに、文化の混交が進む中で自由な表現を目指す運動だった。

訪れた建築の中でも特に、リナ・ボ・バルディの「Casinha」やパウロ・メンデス・ダ・ホッシャの「Casa Gerber」、エデュアルド・ロンゴの「Casa Bola」にもその思想を感じることができた。

これらの建築は、西洋のモダニズムや日本のメタボリズムなど、ブラジルの外から輸入された言語と、ブラジルでみられる瓦や路地空間など、土着的な要素を取り入れながらも、建築家それぞれが独自の方法でそれら統合していた。

訪れたこれらの建築はすべて、個々人の建築家がもつ「イメージ」をもとに、時代も国籍も多様な参照対象を“食べ尽くし”、新たな“身体”として統合したもののように思われた。ここでの「イメージ」とは、ブラジルという土地のもつ集団的記憶に支えられながらも、共有可能でユニバーサルな強度をもつものであったように感じる。

グローバリゼーションが進み、多様な関係性が交錯する現代において、時間と空間を超えて世界を捉え、新たな建築として構築する、「食人的参照」というものが可能ではないだろうか。

### 2. カリカリベーコンとボンデケージョ

オスカー・ニーマイヤーはブラジルモダニズムを代表する国家的建築家であり、今回の調査においても私たちは数多くの作品を見学した。ニーマイヤーの建築を体験して感じたいくつかの要素を分析し、その分類をカリカリベーコンやボンデケージョといった「ブラジルの伝統的な軽食」に準えることを通じ、その組み合わせとして彼の建築を説明する。すなわち、その圧倒的な単純性が彼の建築に独自性を与えているという仮説の提案を試みる。

くわえて、サンパウロの古くからの中心市街地——セントロにある、ガレリアと呼ばれる商業ビルを紹介しながら、ニーマイヤーがデザインした商業建築についても同様に検証する。というのもバウハウスを代表する建築家、マックス・ビル [Max Bill] が強烈に批判したニーマイヤーの商業建築「カリフォルニア・ビルディング [Edifício e Galeria Califórnia]」がセントロに位置しているからである<sup>4)</sup>。

彼の国家的・モニュメンタルな建築が、セントロという都市性やガレリアという商業性を通じてどのように変容しているのかを確認し、その変化を分析する。それらの分析を通じて、西洋のモダニズム建築家が1950年代当時理解できなかったものを、東洋の現代に生きる私たちがどのように再解釈できるのかについて考えたい。

国家的モニュメンタリティを創出する圧倒的な単純性としての自由曲線と、過密な都市への応答や商業空間の演出としてのアグレッシブなファサードや動線にみられる曲線に、果たして違いはあるのか。モダニストには理解できなかった形式を、トロピカーリア運動の背後にある食人思想を再解釈することで、現代のわれわれからの視座を再提出する。

### 3. 南北アメリカ軸の影響関係

近現代のブラジル建築における西洋との影響関係としては、ヨーロッパのモダニズム、とりわけオスカー・ニーマイヤーやルシオ・コスタの仕事に見られるようなル・コルビュジエからの影響が多大なものとして知られている。一方、今回の研究における現地調査および文献調査からは、ブラジル建築とアメリカ合衆国の建築との関係、いわば南北アメリカ軸における影響関係の存在が浮かび上がった。

例えばその1つとして、(ヨーロッパにルーツを持つがもっぱらアメリカ合衆国で活動を行った)リチャード・ノイトラ [Richard Neutra] とブラジル建築との関係が挙げられる。ノイトラは1948年に刊行した著作『温暖気候地域における社会的関心の建築』にも見られるように、カリブ海地域のような、北アメリカとは異なる気候状況のもとでの建築実践を行っていたが、ブラジルについても一時期滞在を行い、現地の建築家との関係を結んでいた。とりわけジョアン・フィルゲイラス・リマ [João Filgueiras Lima] (レレ [Lelé]) のプロジェクトにおけるプレファブリケーションや環境技術的なものへの関心などは、ノイトラの思想とも共通するところが多いが、これはたんにモダニズムの建築家としてのノイトラがブラジルに影響を及ぼしたという話ではなく、両者の関係はより相互的なものであったことが近年の研究では指摘されている<sup>5)</sup>。

また、ノイトラと並んで注目されるアメリカの建築家にバックミンスター・フラーがいる。ノイトラに見られたプレファブリケーションや環境技術などの要素はフラーにも共通するものであるが、とくに1960年代以のブラジルの建築家たちへのフラーへの関心のなかにはもう一点、彼のプロジェクトが有していたカウンターカルチャー的な側面への着目があるように思われる。

### 4. リナ・ボ・バルディとトロピカーリア

建築家リナ・ボ・バルディは、ブラジル移住後まもない1951年に、「洗練の無さ、粗野な感じ、のんきな取り込みと変容こそがブラジルの現代建築の強み」だと書いている<sup>6)</sup>。

リナは1958年から1964年の間、ブラジル北東部のバイーア州都サルヴァドールを第2の拠点として活動していた。当時、この都市では行政や大学による文化面の改革と演劇をはじめとする前衛芸術家たちの動きが同時に起こっていた。

のちのトロピカーリア運動の中心人物であるジルベルト・ジル [Gilberto Gil]、カエターノ・ヴェローゾ [Caetano Veloso] がこの時期にサルヴァドール連邦大学にいたこと、そして、リナが館長を務めるバイーア近代美術館での助手が、彼らに影響を与えた若き映画監督グラウベル・ホッシャ [Glauber Rocha] であったことを踏まえると、リナは間接的にトロピカーリアに影響しているとも言える。そう考えれば冒頭のテキストは一層示唆的であり、「取り込みと変容」という表現に、食人思想と共通したものを見出せる。

ブラジル近代建築の特徴としてよく挙げられる自由で有機的なライン、それらが形作る圧倒的な単純さはモニュメンタリティとして現れる。そして、今回見学したリナの「SESC ポンペイア」やエデュアルド・ロンゴの「Casa Bola」では、単純な形態の隙間に現れる空間の使い方に特徴があるように思われた。

彼らの作品では、民衆芸術に由来する職人仕事やユーモラスな金属細工など、遊戯的なオブジェが隙間に登場し、建築を民衆へと開いているかのように見えた。モニュメンタルな有機性と、その隙間にある遊戯的な表現や空間のありようから、ブラジル建築を読み解いてみたい。

## 5. ランドスケープとバロック精神

ブラジルの建築家たちが、その「豊穡」な環境に住まうがゆえに、建築の構想の基盤となる自らの世界モデルを、眼前に存在する景観、ランドスケープに求めているのではないかと夢想することは容易い。

ポルトガルから流れ着いたバロックの伝統は、のちに飛行機に乗ってやってきた近代建築の思想によっても塗り替えられず、しばしばブラジル固有の佇まいをもってランドスケープと一体化した建築のありようを我々に提供してきた。

広義のランドスケープ・デザインという観点からブラジル建築を解釈することで、師弟関係やアカデミックな文脈、あるいは社会的背景とも異なる、視覚文化としての都市空間が有する偶有性と寓喩性のうちに、ブラジルの建築家たちに受け継がれてきたバロック的な精神をみることができる。

本研究ではブラジル国内の 5 つの都市と 1 つの景勝地を対象とした。具体的には、ベロ・オリゾンテではニーマイヤーとブルレ・マルクスの協働による人工湖を舞台にした曲線と平面表現の実験を、ブラジリアではコスタによる自動車道とニーマイヤーの彫刻的建築を用いた神話の捏造を、リオデジャネイロではロベルト・ブルレ・マルクス [Roberto Burle Marx] による沼地を前提とした前世紀の都市改造の継承と転用を、サルヴァドールではリナ・ボ・バルディによる窓と庭を用いた都市風景の輸送を、アングラ・ドス・レイスではホッシャによる筐体を用いた様相の内部化を、サンパウロ：ジャルディンズではロンゴによる球体とそのニッチがもたらす都市に対する軽さと快適性の獲得を考察した。以上の変遷は、大地を喰らい風景を構築することから、風景を喰らい傍流に佇むことへと、その立場を変えていったブラジルの建築家たちのバロック的精神そのものでもある。

## 6. 日本のトロピカーリア

2024 年秋の現地調査を中心としたブラジルにおける「トロピカーリア建築」研究を通して、上記のように、ブラジル建築に対する従来語られてこなかった複数の視点を獲得すると同時に、それらをより先鋭化するための具体的な主題を提示することができた。各主題は「食人」という普遍の思想のうえに研究会メンバーそれぞれの専門性にもとづいて展開されたものである。今後、追加の研究調査を通じてそれぞれの主題に対する理解を深めていくとともに、すでに 2024 年 2 月に実施し、5 月以降 5 回のトークセッションが予定されているように、それらを広く社会に問いかけることによって、思想としての「トロピカーリア」の普遍性を現代（の日本）に実装する。

### 参考文献等

- 1) クリストファー・ダン著、国安真奈訳 (2005) 『トロピカーリア：ブラジル音楽を変革した文化ムーブメント』、音楽之友社。
- 2) 長谷川祐子・難波祐子・西川美穂子・高城昭夫・中島万里・若林恵編 (2008) 『ネオ・トロピカリア | ブラジルの創造力 When Lives Become Form』、エクスファイアマガジンジャパン。
- 3) 東京国立近代美術館編 (2004) 『ブラジル：ボディ・ノスタルジア』、東京国立近代美術館。
- 4) Max Bill, “Report on Brazil,” in Architectural Review, October 1954.
- 5) Fernanda Critelli, Richard Neutra and Brazil, Romano Guerra, 2023. André Marques, Lelé: diálogos com Neutra e Prouvé, Romano Guerra, 2020.
- 6) Lina Bo Bardi, “Bela Criança,” in Habitat, no. 2, 1951.